日本ラカン協会　第21回大会シンポジウム
ジョイス・結び目・精神病：『サントーム』をめぐって
趣旨説明文（改訂版）および提題概要

日本ラカン協会では、昨年度から二年連続で活動テーマ「ラカンはいかにしてラカンとなったか」を掲げ、一連の企画を展開してきた。その締め括りとなる今回大会シンポジウムでは、1975-76年のセミネール『サントーム』とそのジョイス読解に焦点を合わせ、1970年代における「ラカン」の思想形成について考えてみたい。

『サントーム』は、ラカンの後期思想のなかでも、とりわけ「結び目」をめぐる議論の達成を示すものとしてしばしば参照されるセミネールである。ここで議論の中心となる所謂ボロメオの環は、1971/72年のセミネールXIX巻『…ウ・ピール』ではじめて言及されてのち、徐々にラカンの議論の中に組み込まれてXXII巻『R.S.I.』のセミネールでは中心的な主題となった。もともと「対象*a*」概念の明確化の文脈で導入されたこの装置を、ラカンはXXI巻『欺かれない者は彷徨う』ですでに象徴界、想像界、現実界と明確に対応させるようになっていたが、『R.S.I.』ではそれに一つの標準的な読み方が与えられるようになる。そしてそれを踏まえつつ、続くこのXXIII巻『サントーム』では四番目の環――「サントーム」の名で呼ばれる環――を加えた独自のボロメオ的な結び目が、彼の議論の中心に据えられることになった。

ただし『サントーム』にこうした直線的な整理を許さない曲折をもたらしたものがあるとするなら、それは作家ジェイムズ・ジョイスへの参照である。直前に行われたジョイスについての国際シンポジウムといった機会的な要因もあって、ラカンがこの巨星の及ぼす引力のもと、予定外のカーブを切ることを余儀なくされたことは、たとえばセミネールの予告されていたタイトル『４，５，６』が『サントーム』と変更されたことにもうかがうことができるが、この方向転換は、それがラカンの過去の議論を巻き込むものになったために、いっそう実り豊かなものとなったように思われる。実際このセミネールのなかで、ラカンは精神病についての考え方、とりわけそこで〈父〉の果たすべき機能をはじめとして、彼がそれまで提示してきた概念や装置を新たな形で位置づけるよう導かれている。そしてこの一連の再規定がそれを中心として展開されているのが、ほかでもないジェイムズ・ジョイスの生涯と作品であった。

この意味でセミネール『サントーム』は、到達点というよりむしろ、さまざまな出会いのなかで可能になった「ラカン」の生成の最終局面と呼ぶのにふさわしいものであり、その描くカーブからは、ラカン自身が試みた問い直しを通して、多様な出口を構想することができるように思われる。本シンポジウムでは三人の提題者を迎え、このセミネールでのラカンの議論を紹介しつつ、文学研究の厚みの中でこれを位置づけ、ジョイスへの参照と精神分析の臨床の関わりを具体的なエピソードをもとに再検討し、さらにそこでの結び目の利用の意義を考えることを通じて、そこから浮かび上がるラカン思想の射程を探ってゆく。

日時：2021 年 12 月 5 日（日）　14 時〜18 時
場所：オンライン

提題者：
荒谷大輔（江戸川大学）
今関裕太（江戸川大学）
福田大輔（青山学院大学）

司会：原和之（東京大学）

【提題概要】

第四の輪と「制止・症状・不安」

荒谷大輔（江戸川大学）

『サントーム』のセミネールが「名指し」をひとつの大きな主題とすることは明らかである。「父はひとつの症状、お好みであればひとつのサントームなのです」（p.19, l.31）と言われ、例外者として「外-在」する「父」の「名指し」が 4 つ目の輪として加えられることで、そのままでは解けてしまう象徴界、想像界、現実界の構造に安定がもたらされるとされた。

「原罪（sin-thome）」、「聖なる自治法（sint home rule）」、「聖トマス・アキナス（Sinthome madaquin）」と展開され、ジョイスのボロメオの環の分析において重要な役割を担う「象徴的な名指し」の働きは、しかし、他の異なる「名指し」（想像的名指し、現実的名指し）に並べられるものであった。発表では「サントーム」へ続くセミネール『R. S. I』の議論に遡りながら、ラカンにおける第四の輪の問題がフロイトの「制止・症状・不安」に関わることを確認した上で、ラカンにおけるトポロジーの役割について考えてみたい。

ラカンのジョイス読解と臨床の謎

福田大輔（青山学院大学）

1975 年 6 月、パリのソルボンヌ大学で開催された、ジェイムズ・ジョイス国際シンポジウムにおいて、ジャック・ラカンは Joyce le symptôme という表題の発表をおこなった。その読解は、ボロメオの環の複雑な考察を交えながら、セミネール 23 巻『サントーム』においてさらに展開された。文学批評からも臨床活動からも程遠く見える最晩年のラカンによるジョイス読解について、エリザベート・ルディネスコをはじめとする論者は精神分析臨床からの乖離があると否定的に論じ、ジャック＝アラン・ミレールを筆頭とする論者は新たな精神分析臨床のパラディグムの登場（ボロメオ臨床と銘打たれる）として肯定的に捉えて、

大きく意見がわかれている。おそらく、ここではフロイトの臨床からの離脱が問われており、その離脱の射程はフロイト精神分析の基本概念を揺るがすものになっていると思われる。具体的にはどこまで精神分析の相貌が変わるのか簡便にサーヴェイしてみたい。

応用アクィナス主義からサベリウス主義へ――ラカンとジョイスのR・S・I

今関裕太（江戸川大学）

本発表の狙いは、『サントーム』の議論をジョイスのエクリチュールの通時的変遷に沿って部分的に再構成することにある。ラカンはこのセミネールで、S1→S2 の展開をもたらす想像的介入と象徴的名指しがジョイスにおいては上手く機能せずボロメオの構造に綻びが生じていたことを指摘したうえで、そうした綻びを繕う試みとして彼の（A）応用アクィナス主義（存在と美の短絡）と（B）ララング的文体（象徴界から派生しそれを支えるものとして機能した症状）に言及している。ジョイスが（A）をどの時点までどれほど実践していたか、(B) の萌芽がどこに認められるかの判断は難しいが、本発表ではひとまず彼の創作時期を①「エピファニー集」や『スティーヴン・ヒーロー』、②『肖像』および『ユリシーズ』前半、③『ユリシーズ』後半から『フィネガンズ・ウェイク』の三つに区切ったうえで、それぞれの時期における（A）と（B）の実践の様態を整理・検討する。

以上